

動と静

前号の本欄に修学旅行について書いたあと、六年生の旅行の付添いで奈良・京都方面へ出かけた。

帰ってから一人の担任が学級の子どもに、こんどの旅行で何が一番心にのこっているか、とい
って書かせた作文のなかで、奈良のドリームランドをあげた子が一番多かったが、ただ一人だけ
比叡山の根本中堂のことを書いた子がいたという。それを聞いて、ある感動がわたくしをとらえ
た。

ドリームランドは、文字どおり子どもを夢の世界へ誘う施設に満たされ、スピードとスリルに
よって子どもの興味をはてしなくそる場所である。生命感にあふれる子どもたちが、「動」そ

のもののようなこの場所を喜ぶのは当然である。根本中堂では、知人の青年僧の特別のはからいで、本堂の外陣まで入れてもらった。子どもたちは、森厳静寂な堂内に端座して、十二歳のとき出家した開祖伝教大師の「忘己利他」の教法を諄々と説く青年僧のことばに、じっと聴き入っていた。外陣より三メートル低い所に石畳の内陣があり、外陣と同じ高さに本尊の薬師如来の像が安置され、宝前には千余年の間ともりつづけたという三基の法灯が、清浄な光を保っていた。まさに「静」の極致である。

しかし、日本思想史に不滅の炬火をかかげた、法然・親鸞・栄西・道元・日蓮らの偉才が、こぞってこの法灯のもとで、疾風怒濤の青年期を厳しい修行に送ったことを思えば、この「静」はただの「静」ではない。

多くの子どもたちが、「近代化」の見本のようなドリムランドに心引かれたというのほほえましい。そして一人の子は、根本中堂が一等心にのこっているという。もしそれが、「永遠根源的なもの」の姿をその鋭敏な直観でかきみただとしたら、すばらしいことである。なぜなら、このことは、現在それを意識しない他のすべての子どもたちの可能性をも信じさせるに足るのだから。

(昭和四十年七月)